―序にかえて―

「長崎から〝いのち〟を考える」の出版にあたって，ひと言ご挨拶申しあげます。

本書は大学公開講座のテキストを兼ねるものとして，「現代の生命像」および「長崎原爆とその影響」の二つのシリーズが含まれています。公開講座というのは，今でこそ珍らしくない社会人に対する〝生涯学習〟の一環として，多くの大学で取りあげられている形式の講座です。しかし本学は，全国の国立大学の中でも逸早く〝大学教育開放〟の理念を打ち出し，その具体化の一つとして昭和56年度から今日まで公開講座を実施してきました。学内教官の熱意と受講者の方々の学習意欲とが嚙み合って，これまで国立大学中つねに上位にランクする講座を開設することができました。

今回二つのシリーズを一冊の本にまとめることになったのは，他でもない被爆地の長崎に在る大学として，悲惨な体験の上にいかに人の生命が大切なものであるかを考えたい，とする意志の表われとみなし得ます。戦争は人間を狂気へと駆りたて，家庭も，個人の人権も，個人の生命さえもすべて国家の名において支配されて行きます。そこには〝人命は地球よりも重し〟とする精神の入りこむ余地はありません。戦後45年を経た現在の日本は，平和と繁栄を享受しています。こうした平和な時代であればこそ，個人の生命の尊さやその意義について，改めて問いかけることができるのではないでしょうか。

「現代の生命像」においては，人間の生と死を巡る諸問題について倫理，哲学，宗教，法律，生物学，医・歯学の立場から多角的に論じられると共に，それらを通して人生とは何かについても考えさせてくれるものと思います。また「長崎原爆とその影響」は，被爆の人体に及ぼす医学的影響と同時に，生存被爆者の心身の苦悩や不安を通して，科学兵器がいかに根づよく人々の生命を脅かし続けるものであるかを如実に示しています。

終りに，本書の企画をされた大学教育開放運営委員会ならびに執筆下さった教官の方々に心から敬意を表します。

平成２年４月

長崎大学長　土　山　秀　夫